

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	中 住 幸 治
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>例文の効果的な利用に基づく英文法指導に関する研究 —日本の高校生を対象に—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 深 澤 清 治</p> <p>審査委員 教 授 中 尾 佳 行</p> <p>審査委員 教 授 築 道 和 明</p> <p>審査委員 教 授 森 敏 昭</p> <p>審査委員 教 授 松 見 法 男</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、英文法指導で利用する例文に関して、1) 文法項目が持つ基本概念が理解でき、より積極的なコミュニケーションにもつながる、良質な英語例文のあり方とその条件提示、2) 良質な例文を軸とした英文法指導が、学習者の文法項目への理解・定着につながる可能性の検討、を目的としている。</p> <p>第1章では、まず英文法指導において例文の質への考慮が不足している現状を示す例として以下の点を論じた。1) 英文法指導において例文は単なる手段・道具として軽視され、その結果、文内容も無味乾燥で実用性に乏しい傾向にある、2) 単語と文法規則だけ覚えていれば外国語は習得できる、と考える傾向がある。その上で、例文に焦点を当てた研究の必要性を指摘した。</p> <p>第2章では、本研究の目的に即して先行研究の概観を行った。第一に、例文が明示的指導と暗示的指導の両方に寄与し得ることと、例文を含めインプットの質の充実が求められること、等を論じた。第二に、「例文」が「文」であることだけでなく最小限のテキスト的要素も持つべきであることを論じ、さらに、良質な例文の条件を内容的要素、言語的要素、の2点から記した。第三に、言語学の視点から、1) ネットワーク・モデル（例文提示順・例文配置等）、2) 関連性理論（例文と文脈・推論の関係性）、3) コーパス言語学（例文分析、例文検索）、を援用して例文について論じた。最後に、第4節ではここまでの議論に基づいて、次の3つを研究課題として設定した。1) 学習者・教員は英文法指導における例文についてどのように考えているのか（第3, 4, 5章）、2) 例文を効果的に生かした英文法指導により文法理解は高まるか（第5章）、3) 学習者・教員の視点に立った、英文法指導に適した良質な例文の条件とはどのようなものであるか（第4, 5章）。</p> <p>第3章では、まず調査1として学習者178名と教員10名を対象に主要文法項目への難易度調査を行った。その結果に基づいて、9文法項目（完了形、助動詞、分詞、比較、関係代名詞、関係副詞、仮定法、話法、無生物主語）に絞った。次に調査2として、検定教科書（英語I, II）と市販英文法教材からそれぞれ3種ずつ選定した上で、掲載例文1,250を検討した。その結果、例文数は市販英文法教材が多いが例文内語数は検定教科書の方が</p>			

多いことや、英語Ⅰ、Ⅱの検定教科書では扱われない文法項目（無生物主語、話法等）があること、等を論じた。さらに調査3では、前述の掲載例文から文法項目ごとに例文を抽出し、英文法指導での適切さを4人の高校教員に尋ねた。その結果、1) 文脈や状況が見えない、2) 固定観念を含んでいる、3) 文法的に問題がある、4) 必然性に乏しい、等の問題点を含む例文が見られることが分かった。

第4章では、調査4として学習者281名を対象に、例文の在り方に関する質問紙調査を行った。また調査5として、教員を対象に例文の在り方に関する質問紙調査を行い、97名から回答を得た。その結果、以下の点が示唆された。1) 教員は例文を重視し、学習者は軽視する傾向にあり、学習者・教員とも教材例文の質には満足していない、2) 特に無生物主語では教員が最重要視、学習者は最軽視、という対照的な結果であり、さらに学習者が無生物主語の定義を理解していない可能性がある、3) 例文内語数は理想的には8語、単文・複文を考慮すると4～12語が適切である。さらに、良質な例文の条件として以下の点を提示した。1) 内容的要素：印象インパクト、学習者の興味関心、身近さ、文脈、2) 言語的要素：文法使用の必然性、母語話者にとって自然であること、リズム音声、分かりやすさ。

第5章では、調査6として、例文の質に配慮した英文法指導を行った。予備調査として高校2年生の英語Ⅱ授業において、統制群34名、実験群34名を対象に1) 事前テスト、2) 指導（関係代名詞の非制限用法）、3) 事後テスト①、4) 事後テスト②・アンケート、の手順で実施した。統制群は教科書例文のみで指導を、実験群ではそれに良質な例文を加えて指導を行った。次に本調査として高校1年生の「英文法」授業において、実験群Ⅰ20名、実験群Ⅱ19名を対象に、予備調査と同じ手順で実施した。指導対象文法項目は仮定法であった。実験群Ⅰ、Ⅱとも同構成のハンドアウトを使用した。唯一異なるのが、実験群Ⅱに質に考慮した例文を取り入れたことであった。その結果、指導直後は両群ともほぼ同じ様に成績が上昇したが、指導から一定期間後は良質な例文を取り入れた群に成績保持増進の効果が見られた。このことから指導直後は指導の影響が強く出るのに対して、一定期間後は例文の質が影響する可能性が示された。また、内容的に良質な例文が学習者の印象に残りやすいこと、例文語数が多すぎると学習者の印象に残らないこと、も示唆された。

今日まで英文法指導に関する様々な研究が行われる中で、本論文の独創性は以下の三点にまとめられ、学術的および教育的意義を評価することができる。

- (1) 英文法指導において、研究が十分になされていない「例文」に焦点を当て、例文の質を考慮した英文法指導に関する実証的研究の一方法を提示したこと。
- (2) 例文に対する考えについて学習者と教員の間ギャップがあることや、質の良い例文を活用することで、学習者が学習後も成績を保持する可能性を示したこと。さらに、学習者・教員・教材の3視点から、適切な例文内語数範囲を提示したこと。
- (3) 英文法指導の中で例文の質を検討する際に考慮すべき要素を1) 内容的要素、2) 言語的要素、の2面を基準として、一連の英文法指導の流れの形で図示したこと。

本論文は、日本の英語教育において重要な知見や理論を示すとともに、教育的示唆を与えるものであり、今後、関連した研究・教育を行う上で重要な視点を提供するものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成26年2月14日